

知的障害特別支援学校における防災教育の あり方に関する一考察

ー現状の聞き取り結果と、教育課程に位置付けた実践の検討を通してー

和田 充紀・池田 弘紀*・池崎 理恵子*・栗林 睦美*

A Study on the Way of Disaster Education in Special Support School for Students with Intellectual Disability

: Through Examination of Hearing Investigation and Practice on the Curriculum.

Miki WADA, Hiroki IKEDA, Rieko IKEZAKI, Mutsumi KURIBAYASHI

摘 要

知的障害のある児童生徒にとって、学校生活での防災教育は必要不可欠である。特別支援学校においては、避難訓練や備蓄など防災に対する意識は高いが、地域との連携や防災教育の日常の授業実践は少なく、これからの課題と考えられる。特色ある防災教育の実践に取り組む特別支援学校の事例を取り上げ、有効な防災教育の内容や特別支援学校に求められる防災教育のあり方について検討を行った。

キーワード：知的障害、特別支援学校、防災教育、教育課程

keywords：Intellectual disability, Special support school, Disaster Education, Curriculum

I はじめに

1995年に起きた阪神・淡路大震災、そして2011年の東日本大震災の後、学校における防災体制や防災教育の充実・推進が進められてきている。

まず、内閣府中央防災会議「防災に関する人材の育成・活用専門調査会」(2003)では、「学校における防災教育を推進すべきである」と報告されている。次に、「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議（最終報告）」(文部科学省, 2012)では「特別支援学校における障害のある児童生徒等については、障害の状態・発達の段階・特性等及び地域の実態等に応じて、自ら危険な場所や状況を予測・回避したり、必要な場合には援助を求めたりすることができるようにする」と指導上の指針に関する記載がみられる。また、「学校防災のための参考資料：『生きる力』を育む防災教育の展開」(文部科学省, 2013)には、児童生徒の発達段階に応じた防災教育の指導内容の例が示されており、防災教育の重要性が指摘されている。加えて、特別支援学校の小学部の学習指導要領の知的障害児の生活

科に関する事項には「災害時に適切な行動ができるように具体的な指導内容を示す」という記載があり、特別支援学校の児童生徒にとっても防災に関する教育的取り組みや授業は必要不可欠なものと言える。

一方、藤井・松本(2014)は、岐阜県と静岡県の特別支援学校の防災に関わる業務を担っている教職員を対象として防災教育に関する実態調査を行い、避難訓練の実施回数や避難訓練以外の防災教育に関わる授業の実施状況には地域や学校間の隔たりが大きいことを報告している。また、知的障害のある児童生徒の実態に合う防災教育の教材が少ないと言及している。

知的障害特別支援学校に在学している児童生徒は、状況判断や口頭による指示を理解することが苦手であり、状況の変化への適応に時間を要することが多い。また、自分の置かれている状況を説明したり自分から支援を求めたりすることが苦手など、障害特性による困難さがみられる場合がある。「災害時に適切な行動ができるように」なるためには、これらの障害特性や実態を考慮した日常的な防災教育が必要となる。しかしながら、知的障害特別支援学校における防災教育の取り組み状況は十分とはいえず、防災教育の実施に向けた検討や実践例等の提案も不

*富山大学人間発達科学部附属特別支援学校

十分な現状である。

そこで、知的障害特別支援学校における防災教育に関する避難訓練や備蓄に関する現状、日常の授業実践の取組状況を把握し、特別支援学校における防災教育の今後の方向性を示すことが急務であると考えた。本研究では、知的障害特別支援学校への聞き取り調査をととして、知的障害のある児童生徒に対する防災教育の現状と課題を明らかにし、知的障害特別支援学校における防災教育のあり方について検討することとする。

Ⅱ 調査：知的障害特別支援学校における防災教育の現状と課題

1. 目的

知的障害のある児童生徒が在籍する特別支援学校を対象として、学校防災に関する取組に関する聞き取り調査を行い、特別支援学校における防災管理や防災教育の現状と課題から特別支援学校の求められる防災教育のあり方について検討する。

2. 方法

(1) 調査対象

Z県内知的障害特別支援学校8校の防災教育担当責任者または担当教師計8名。

調査対象校プロフィールは表1のとおりである。

(2) 調査内容と調査方法

①防災に関わる避難訓練の有無、②避難訓練の実施回数、③避難訓練の内容と工夫、④災害

用備蓄の有無、⑤防災教育に関する地域との連携の有無、⑥教育課程に位置付けた防災教育に関わる授業の有無、⑦課題、という7つの事項について聞き取り調査を行った。①④⑤⑥については2件法で、その他は自由回答法を用いた。

(3) 分析の方法

聞き取り内容は筆者が用紙に記録を行い、記録内容をもとに調査結果のカテゴリー分類等を行った。

3. 結果

防災に関する取り組みの結果を表2に示す。

(1) 避難訓練の実施について

避難訓練を実施している学校は8校中8校(100%)であった。

火災を想定した避難訓練を実施している学校と、地震を想定した避難訓練を実施している学校はいずれも8校中8校(100%)であった。また、地震と火災を合わせて実施している学校は8校中5校(62.5%)であった。

(2) 避難訓練の実施回数について

年間に避難訓練を3回以上実施している学校は8校中8校(100%)であった。4回以上実施している学校は8校中6校(75%)であった。

(3) 訓練の内容と工夫について

自由回答の中で挙げられた避難訓練の内容や工夫については表3に示すとおりである。

避難訓練の内容は、火災や地震、津波を想定

表1 調査対象校プロフィール

	学部	付帯施設	障害種	地理的な特徴	児童生徒数	職員数
A校	小・中・高	寄宿舎	知的	標高：29.3m 海からの距離：10km以上	251～300人	151～200人
B校	小・中・高	福祉型 障害児入所施設	知的 肢体併設	標高：2.4m 海からの距離：1km以内	151～200人	101～150人
C校	小・中・高		知的 肢体併設	標高：97.1m 海からの距離：10km以上	101～150人	101～150人
D校	小・中	福祉型 障害児入所施設	知的	標高：102.7m 海からの距離：10km以上	50人未満	50人未満
E校	小・中・高	寄宿舎	知的	標高：24.6m 海からの距離：10km以上	201～250人	151～200人
F校	高		知的	標高：114.1m 海からの距離：10km以上	50～100人	50人未満
G校	高		知的	標高：22.2m 海からの距離：10km以上	50～100人	50人未満
H校	小・中・高		知的	標高：7.6m 海からの距離：10km以内	50～100人	50人未満

表2 防災に関する取組結果 (N=8)

	実施している	実施していない
防災に関する組織	8	0
防災訓練	8	0
火災を想定した訓練	8	0
地震を想定した訓練(津波含む)	8	0
災害用備蓄品	8	0
地域と連携した訓練	0	8
教育課程に位置付けた授業実践	3	5

表3 避難訓練の内容と工夫

<ul style="list-style-type: none"> ①授業中②休憩時間(移動中)③予告なし(週のみ予告)授業中, など状況を変えて年間3回実施 火災と地震をセットで実施 始業式の日に実施 近接小学校への二次避難を実施 緊急通報システムを使用しでの訓練 学校と福祉型障害児入所施設で合同で実施 避難訓練の内容やキーワードについて, パワーポイントで提示 避難訓練の内容やキーワードについて教室掲示 重要な3つの動作(「まず低く」「頭を守り」「動かない(1分程度)」を絵カードで示す 緊急連絡情報の活用 寄宿舎で, 事前, 事後にチェックリストを活用 煙中体験の実施 消防車見学の実施 はしご車の見学の実施 竹の棒と布で作成した簡易タンカーを活用した訓練の実施 消火器を使った模擬体験の実施 泡消火器を使用した体験の実施
--

表4 災害備蓄の主な内容

水 パン, レトルト白米, レトルトチキンライス, 味噌汁, カロリーメイト, 毛布, アルミシート 簡易トイレ(テント) ラジオ アレルギー対応の白米, レトルト食品 医療ケアの児童用薬品
--

した訓練, またはそれらを合わせたものなど様々であった。地震を想定した訓練では, 「県民一斉防災訓練〜シェイクアウトとやま〜(<http://www.shakeout.jp/event/toyama>)」の予定日と重ねて実施している学校が8校中7校(87.5%)みられた。

訓練の方法として, 「事前に訓練の日時を伝えて避難訓練を実施する」, 「予告ありの訓練と予告なしの訓練を実施する」, 「授業中の訓練と

休憩時間の訓練を実施する」など, 訓練状況に変化をつけて段階的な訓練となるように工夫している学校が8校中3校(37.5%)みられた。(表3)

(4) 災害用備蓄について

防災用備蓄を実施している学校は, 8校中8校(100%)であった。備蓄品の主な内容は, 表4にあげたとおりであり, 大きく次の5種類に分けられた。

- ①食品(水, パンなど)
- ②防寒用品(毛布など)
- ③衛生用品(簡易トイレなど)
- ④情報機器(ラジオなど)
- ⑤アレルギー対応食品や在籍児童生徒用の薬品(医療ケア児童用薬品など)

また, 備蓄品に関しては, 安心のために備蓄するだけではなく, 「保護者, 生徒, 教師とで, 炊き出しの訓練を実施した」「避難訓練時や夏休みの登校日に食べた」などの自由回答がみられた。このことは, 訓練の一環として活用することで, 体験を通して児童生徒に防災教育に役立てる取組も行われていることを意味している。

しかしながら, ①の食品のみの備蓄を挙げた学校(8校中3校)から, ①②③④の多種にわたる備蓄を行なっている学校(8校中2校)まで様々であり, 備蓄の内容や量には学校間で違いがみられた。備蓄の実施はあるものの内容の充実には至っていないことが伺えた。

(5) 防災教育に関する地域との連携について

3回以上の避難訓練を実施し, そのうち1回以上は消防署員が訓練に立ちあうなどの連携を行なっている学校は8校中7校(87.5%)みられた。

自由回答では, 「地域と連携したいと要望したが, 実現にはいたっていない」と回答した学校が1校あった。また, 「地域住民から希望があり, 学校の訓練の様子を見学された」と回答した学校が1校あったことから, 学校近隣の地域との連携には至っていないが, 学校・地域ともに連携を模索している傾向が伺える。しかしながら, 聞き取りの結果では, 地域と連携した避難訓練を実施していると回答した学校は8校中0校(0%)であった。

(6) 教育課程に位置付けた防災教育に関わる授業について

避難訓練以外での防災教育に関わる授業を実施していると回答した学校は、8校中3校(37.5%)であった。3校のうち1校は「総合的な学習の時間に位置づけて実施している」と回答し、2校は「特別活動に位置づけて実施している」と回答した。「実施していない」が5校の結果であった。

「総合的な学習の時間」では、「地震防災について考えよう」の単元における授業実践が挙げられた(Ⅲ.2にて詳述)。「特別活動」で実施している学習の内容としては、「消防署への校外学習をととして、安全について学習する機会を設定している」や「紙芝居やDVDを見て地震について知る、机の下に隠れる練習をする」の実践が挙げられた。

しかしながら、避難訓練の実施に比して、避難訓練以外での防災教育に関わる授業の実施は少ない現状であった。

(7) 防災教育における課題について

聞き取りを行った各校から挙げられた防災教育における課題は、表5にあげたとおりである。

表5 課題として考えている内容

- ・津波の訓練
- ・防火訓練
- ・生徒が実際に消火器を使う訓練
- ・地域の方の協力を得て行う訓練
- ・施設、地域を皆で守るための訓練や工夫
- ・いざという時に助け合うための訓練
- ・地域との連携と啓発
- ・日常的な学習
- ・日常的に社会情勢などを伝えていく取組
- ・社会科や理科など教科に位置付けた取組
- ・保護者との連携
- ・保護者への引き渡し訓練
- ・学部ごとの取組を学校全体へつなげていく取組
- ・人手が少ない中での効率や安全を考えた訓練
- ・家庭や保護者との連絡の取り方
- ・休日、夜間の家庭や地域での支援や対応が課題
- ・生活範囲に対応した取り組み(生活範囲が広い)
- ・卒業後のことを考えた積み上げ
- ・寄宿舎の環境整備(夜の支援者人数が少ない)
- ・学校生活以外の場でも自分を守る力に繋がるような力を育てる取組
- ・災害時に助けや援助を依頼する方法を身につける取組

各学校から挙げられた課題は次の6点に集約されると考える。

- ①避難訓練や防災訓練を充実すること
- ②地域との連携を図ること
- ③家庭や保護者との連携を図ること
- ④日常的な防災教育を実施すること
- ⑤学校以外でも自分で身を守る方法を身に付け、学校以外の場で対応できるようにすること
- ⑥避難時に安心して過ごすことができるような環境の確保や自分から援助を依頼する方法を身に付けること

4. 考察

以上の結果から、次のような現状と課題が見出された。

避難訓練や災害用備蓄の実施率は高く、様々な工夫も行なわれており、学校としての防災意識が高いことが伺える。

一方課題としては、備蓄が充実までには至っていないことや、地域との連携が実施されていないことが示唆された。また、各学校では、前述したような課題を抱えていることもわかった。これらを総括すると、知的障害特別支援学校において、児童生徒の災害対応力を高めるためには、次の2点の充実が求められると考える。

(1) 障害特性を考慮し、地域との連携を意図した避難訓練の充実

佐藤(2012)は「日ごろから地域に開かれた学校づくりを心掛け、地域の方々と交流をもち、緊急時には地域の方々に学校に目を向けてもらえるようにすることが大切」と指摘している。しかしながら、特別支援学校在学の児童生徒にとっては通学範囲が広く、学校設置地域と居住地域が異なるため「二重の地域との連携を構築する必要」(藤井・松本, 2014)があり、地域との連携には大きな課題がある。

一方、矢崎(2012)は、地域が主体となる避難の必要性に関する研究の中で、児童生徒が学校にいる時間よりもない時間の方が長いことを報告している。1年間365日を時間にして計算すると8,760時間となり、そのうち児童生徒が学校に滞在している時間は1,350時間である。つまり、児童生徒が学校に滞在している時間は、約15%程度にすぎず、学校以外にいる

時間の方が圧倒的に長いことになる。

各学校からも、登下校時や在宅時等の避難についての課題が挙げられているように、地域との連携は必要不可欠であり、児童生徒の生活実態に即した防災教育の推進のためには地域との連携を図る取組が重要であることが示唆されている。

(2) 年間指導計画に明記し教育課程に位置づけた授業実践と、障害特性や生活スタイルに応じた防災教育の充実

「児童生徒の災害対応能力を主体的に高めるための教育的工夫に加えて、防災をいかに日常生活の中に定着させるか」（藤井ら、2014）の指摘にみられるように、避難訓練以外での防災教育に関わる授業の意義は大きい。

自閉症の児童生徒にとっては、混乱状況の中で、口頭の指示内容を正確に聞き取ることや、急激な環境の変化の中で適切な行動をとることが困難であり、個別の対応を必要とする場面が容易に想像できる。そのような場面においては周囲の対応に加えて自分から状況を判断し援助を求めることも必要となる。宮城県の特設支援学校では、タブレットや SOS カードを使用して、災害時に自分から支援を求めるための実践を進めている（近藤、2015）。情報を収集することや支援を求めることも災害対応能力と捉え

て防災教育の授業実践を進めていくことが必要である。

調査を行った 8 校のうち 2 校は寄宿舎を、2 校は福祉型障害児入所施設を併設している。生活の場が自宅だけではなく、寄宿舎や福祉型障害児入所施設など様々であることから、多様な生活スタイルに応じて、防災教育のあり方の検討・充実が求められている。

Ⅲ 富山大学人間発達科学部附属特別支援学校における防災教育の取組

ここでは、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校における避難訓練と防災教育の授業実践を取り上げる。防災教育について全校的な実践をし始めている学校の取組である。

Ⅱの調査結果から得られた防災教育の課題に関連した実践を紹介するとともにそれらの成果から、知的障害特別支援学校に求められる防災教育のあり方について検討する。

1. 学校における避難訓練の現状と成果

(1) 学校全体で実施する避難訓練等の現状

①避難訓練等の年間計画と内容について

学校全体で実施している避難訓練及び防災教室の年間計画とそれぞれの内容を表 6 に示す。

表 6 防災に関わる避難訓練の年間計画と内容

	避難訓練の計画	主な内容
4 月		
5 月	第 1 回避難訓練（火災） 防災教室 （水消化器の体験）	・授業中に火災が発生したことを想定して行う。 ・避難訓練の実施を児童生徒に予告して行う。 ・消防署員に避難状況について講評をもらう。
6 月		
7 月		
8 月		
9 月		
10 月	第 2 回避難訓練 （地震・津波） （四校合同避難訓練）	・授業中に地震が発生したことを想定して行う。 ・地震発生時の対応訓練の後、地震終息後に津波警報が発令したことを想定し、津波時の避難場所である附属中学校屋上への避難訓練を行う。
11 月		
12 月	第 3 回避難訓練（火災） 防災教室（煙中体験）	・休み時間等教室外で活動している時間帯に火災が発生したことを想定して行う。 ・児童生徒には事前に告知せず、突然の警報に対応する訓練の機会とする。 ・消防署員に避難状況について講評をもらう。
1 月		
2 月		
3 月		

避難訓練は年間3回実施しており、内訳は火災を想定した避難訓練が2回、地震・津波を想定した避難訓練が1回である。地震・津波を想定した避難訓練は学校独自の訓練ではなく、大学附属四校園（幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校）合同避難訓練として実施している（「(2) 附属学園で実施する取組について」で詳述）。また、防災に必要な技能や態度の育成のために、水消化器の体験や煙中体験などの防災教室を年間2回実施している。

②障害の特性に配慮し、災害対応力を高めるための工夫について

避難訓練における配慮や工夫は次にあげるとおりである。

- ・第1回、第3回避難訓練は、火災の発生場所、避難場所を変えるなど、想定される避難状況について多様に体験できるようにする。
- ・避難が必要な状況への知識を深めるため、事前学習を行ったり、消防署員の話の聞いたりする機会をもつ。
- ・第1回は事前に予告をして授業中に行う訓練を行い、第3回には事前の予告なく休憩時間に行う訓練とするなど、様々な状況で判断しながら避難をすることができるよう訓練内容や想定状況に変化を付けて計画をしている。
- ・火災での避難訓練では、ハンカチを口にあてること、津波での避難訓練では、気温に合わせ防寒具を着用すること、携帯電話を持つことなどを実際に行い、避難時に適切に対応ができるようにする。
- ・避難時の対応を分かりやすくキーワード（「お」「は」「し」「も」など、「お：おさない」「は：はしらない」「し：しゃべらない」「も：もどらない」）にしたものを訓練の機会に繰り返し学習し、理解を深める。

(2) 附属四校園（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校）合同で実施する取組について

①避難訓練の実実施計画、目的

附属四校園合同で実施する避難訓練の目的と内容は次のとおりである。

- ・地震・津波災害に対して、児童生徒の安全を確保するとともに、安全意識の高揚を図

る。

- ・附属四校園合同で、同日同時刻に地震・津波対策の避難訓練を実施する。
- ・地震が終息した後、津波警報が発令されたという想定により、幼稚園、小学校が避難場所としている附属小学校屋上と特別支援学校、中学校が避難場所としている中学校屋上に、各校園の幼児、児童生徒が全員避難する訓練を行う。
- ・附属四校園合同で実施することで、津波避難の重要性を知るとともに実際に避難を体験して、災害時に適切に対応する力を育成する。

この合同避難訓練の取組において、児童生徒は見慣れない人と一緒の場で待機する避難訓練を体験することや、教師の支援を受けながら慣れない環境で落ち着いて過ごすことができた。児童生徒にとっても教師にとっても、学校だけで単独で行う訓練とは異なり、現実味のある避難訓練と言える。

(3) 備蓄について

災害備蓄品の内容について、表7に示す。富山大学人間発達科学部附属特別支援学校においては、①食品、②防寒用品、③衛生用品、④情報機器、に関する品が細かく備蓄されていることが分かる。

表7 災害備蓄品の内容

品名	数
給水バッグ	10 個
白飯	50 食
災害備蓄用パン	24 缶
ミニクラッカー	24 缶
マイルディシート20m巻	1 個
圧縮下着セット（女性用）	5 個
圧縮軍手&タオル	20 セット
エマージェンシーシェラフ	10 個
エコロジー食器セット	1 個（100セット）
非常用トイレ	100回分
簡易トイレ（テント）	1 台
簡易組立便座（和式用）	1 箱
ハンディキャリパー	1 台
折りたたみランタン	2 個
カセットコンロ	1 個
カセットガス	3 本
手回し充電ラジオ	1 個
フリース毛布	5 枚

2. 教育課程に位置付けた防災教育に関わる実践と成果

(1) 総合的な学習の時間における高等部の授業実践

①年間指導計画の位置づけ

防災教育の年間指導計画への位置づけは、表

8に示すとおりである。高等部全体で行う「総合的な学習の時間」に位置付けて授業実践を行っている。

②指導内容および展開例

総合的な学習の時間における単元「地震防災について考えよう」の指導計画を表9に、実

表8 高等部 年間指導計画

		月		10		11		12		1		2		3			
教科別	国語	A	伝えよう、聞いてやってみよう、様子を話そう・書こう														
		B															
		C	作文を書こう、自分の考えを伝えよう、メモをとろう														
		D	メモをとろう 電話の応対 感想を伝えよう														
		E	電話の応対 大切なことをまとめよう(説明文)							感想を発表しよう(小説) 四字熟語・ことわざを覚えよう							
		F	調べて発表しよう 正しく伝えよう 感想を伝えよう							分かりやすく説明しよう 四字熟語・ことわざを覚えよう							
	数学	A	金銭(金種、ちょうどの額・多い額を出そう)、							長さ(比べる、ものさし) 重さ(比べる・測る) 表・グラフ							
		B	金銭(金種、金額内の買い物、レシートの読み取り)							生活に生かせる長さ・重さ・かさ							
		C															
		D	金銭(おおよその値段、割引の計算、レシートの読み取り)							生活に生かせる長さ・重さ・かさ							
		E								時刻表の活用							
		F	生活に生かせる長さ・重さ・かさ							金銭(生活費・小遣い帳、割引・割り勘)							
指導	外国語		英語を知ろう(食べ物、国、身体部位、スポーツ、曜日、場所、天気、色、気持ち、動きなど) 英語を話そう(スピーチ、英語劇)・ 英語を書こう(単語、英文)														
			英語を使ったゲーム														
	情報		いろいろなソフトを利用して作成しよう(ポストカード、カレンダーなど)														
			情報モラル、情報発信														
	保健	保健	健康と生活習慣							病気の予防							
	体育	体育	球技(キックベースボール、サッカー、バスケットボール)							器械運動、 創作ダンス							
	芸術	音楽	歌詞の内容や曲想などを味わいながら歌おう							楽器の特色や音色を生かして合奏しよう							
			音楽に合わせて身体表現やダンスをしよう							音楽の美しさを味わって聴こう							
		美術	彫塑作品を作ろう							版の表現を楽しもう			工夫して描こう				
			自分の作品のよさ、友達の作品のよさを見つけよう														
各教科等を合わせた指導	作業学習	班別作業	木工	製品製作② (ミニ門松)							製品制作③ (デザインを考えて、キーホルダー・コースター、マグネットなど)						
			清掃	ビル清掃を想定した清掃作業Ⅱ チームでの清掃作業 (机や椅子のセッティングを含む)							ビル清掃を想定した清掃作業Ⅲ チームでのワックス掛け作業 (ポリッシャー掛け、バキュームクリーナー掛け 等)						
			縫製	製品製作① (コースター・ランチョンマット・小物入れなど) (刺し子の模様付け・しつけ・ミシン・アイロン)							製品製作② (布バッグ・ペットボトルホルダーなど) (しつけ・ミシン・アイロン・ゴム通し)						
			ハウスキーブ	分担された作業に取り組もう							シフト表で確認して、一連の自分の作業を行おう 洗濯(干す・畳む・収納)、掃除(部屋・窓・玄関・トイレ・風呂・庭・ゴミ分別)、炊事(おやつ作り・お茶入れ・食器洗い)、車いす操作、掃除						
		就業体験					秋季就業体験						冬季就業体験(高3)				
	生活単元学習	1年	秋季就業体験について考えよう・振り返ろう							得意なことと苦手なことについて考えよう・ いろいろな働き方、暮らし方について考えよう					今年の「働く、暮らす」を振り返ろう		
			金銭の管理をしよう (口座開設、銀行の利用)							いろいろな家事に取り組もう (レトルト食品や電子レンジなどを使った簡単な調理)							
		2年	秋季就業体験について考えよう・振り返ろう							働くために必要な力について考えよう					今年の「働く、暮らす」を振り返ろう		
			(昼食・弁当作り)		金銭の管理をしよう (ATMを利用した身近な物の購入や外食)					いろいろな家事に取り組もう (自分の部屋の整理・整頓・掃除)							
		3年	秋季就業体験について考えよう・振り返ろう							卒業後の「働く、暮らす、遊ぶ」について考えよう②			学校生活を振り返ろう				
			家庭生活について考えよう② (余暇の過ごし方、金銭管理)														
		日常生活の指導			健康管理と安全、予定の管理、移動(仕事チャレンジ、係チャレンジ、運動チャレンジ、マイチャレンジ、朝の会)												
	領域別の指導	道徳		(自分自身に関すること、他の人との関わりに関すること、自然や崇高なものとの関わりに関すること、集団や社会との関わりに関すること)													
		特別活動	学校行事	学習発表会												卒業証書授与式	
			学部活動				チャレンジ発表会									卒業を祝う会	
			HR活動	個人及び社会の一員としての在り方生き方、学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定に関すること													
			委員会														
		自立活動		健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーション													
	総合的な学習の時間	1年	学習発表会を成功させよう テーマを決めて調べよう、発表しよう (防災・消費生活の危険・インターネット)							余暇施設・公共施設を利用しよう					卒業生のお祝いしよう		
		2年								余暇施設・公共施設を利用しよう							
3年		福祉サービスを調べよう(療育手帳・障害基礎年金・関係機関の利用)								卒業を祝う会で発表しよう							

表9「地震防災について考えよう」指導計画

1 単元名「地震防災について考えよう」			
2 ねらい			
・地震災害時における危険を認識し、日常的な備えを行う必要性に気付く、自らの安全を確保するための行動を考えたり話し合ったりすることができるようにする			
3 全体計画			
○月○日	3限	学校の防災設備について調べよう	
	4限	学校での避難行動について考えよう	
○日	3限	自宅での避難行動について考えよう	
	4限	非常持ち出し品について考えよう①	
		・チームで話し合ってみよう	
		・災害時にはどんなことが起こるかを聞いて、再度考える	
		・各チームで発表する	
	宿題	・非常持ち出し品が準備してあるか調べる	
		・家から避難場所への避難経路を調べる	
○日	5限	家庭における防災について考える	
		・調べてきた自分の家での非常持ち出し品について発表する	
		・屋外で危険なことについて話を聞く	
	6限	校外学習について知る	
		・四季防災館について知る	
		・日程を知る	
		・昼食場所を決める	
○日		四季防災館への校外学習	
○日	2限	事後学習	
4 展開 ○月○日(○)3限			
配時	活動内容	指導上の留意点など	準備物
7	○あいさつをする		PC
	○本単元での学習について知る	・生徒の様子を観察し、情緒面への配慮を行う	PJ
	・東日本大震災の動画を見て、地震の怖さを確認する。	・GWIに高山でも地震があったことなどを例に出す	延長コード
	・地震は身近に起こることを確認する		
	・地震は防ぐことはできないが、自分たちで命を守ることができることを確認する		
20	○学校内の防災設備について話し合う	・キーワードを提示する	プリント
	・学校にある防災設備には、どのようなものがあり、どんな働きがあるかを調べる	「火災が起こるかも・・・」	
	・班ごとに意見交換する	「避難が必要かも・・・」	
		・イメージしにくい場合は、高2周辺を探させる	
5	○発表する、聞く	防災設備	
	・3班が発表する	①消火栓 ②非常口表示灯	
	・1、2班は発表を聞き、補足があれば発表する	③消火器 ④防火扉	
		⑤火災報知器	
15	○学校内の防災設備について調べる	・学校には災害に備えて、防災設備が多く配置されていることに気付かせる	校舎平面図
	・班ごとに学校探検を行う。		シール
	・防災設備ごとに色分けされたシールを校舎平面図にはる		防災設備設置地図(教師用)
3	○本日のまとめをする		
	・感想を述べる		
	・教師の話を聞く		
	○あいさつをする		

際の授業場面を図1に示す。

「地震災害時における危険を認識し、日常的な備えを行う必要性に気付いたり、自らの安全を確保するための行動を考えたりすることができるようにする」ことを目標として計画している。

③生徒の変容

学習後の生徒の感想を次に示す。

<防災の学習をして考えたこと>

- ・地震は危ないのでしっかり頭を守ります。家ではすぐに机の下に隠れます。
- ・東日本大震災でたくさんの人が津波に襲われ亡くなって、過去より大きな災害であって、最も危険だと思いました。私はこんな大きな地震が来たら、頭を守る、安全な場所へ避難するなど、自ら命を守ろうと考えました。

<家族とはなしあったこと、感想>

- ・大地震がきた時、どこに避難すればいいか話し合う。
- ・非常袋に何が必要なのかを話し合う。
- ・家族がバラバラな時に地震にあったらどうすればいいか聞く。
- ・被害が起きた時の対応について家族と話し合い、事前に備えて準備をしようと考えています。エコキュートのタンクから水が取り出されるようになっています。空のペットボトルに入れようと考えました。

この授業実践では、防災設備や危険個所について知る基本的な学習や、非常持ち出し品を家族と一緒に考える具体的な学習を積み重ねた。これらの積み重ねを通して、避難時には自分の身体や命を守ることを理解へとつながり、家族が別々に避難したときにはどのように連絡をとるかなど、実際の避難場面を想定して自分の行動を考え、家庭で相談するまでの変容が見られた。

学習の中で使用した「学校の防災設備について調べよう」、「非常持ち出し品について考えよう」、「事後学習」での生徒のワークシート(図2)を次に示す。

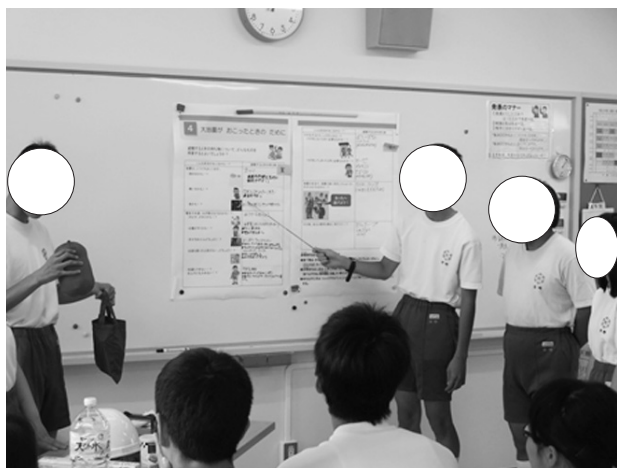










図1「地震防災について考えよう」の授業場面

こんな状況がおこるかも？	避難する時の持ち物
地震は、いつでもおこります。 ・雨の日かも！？ 	かさ、傘は→逃げやすい 風が強いときはさかさまで持ち運ぶ これなら 地震のときはいかに安全に コート(防寒着) シール 避難所に必ず置いておく タオル 毛布 避難所へ必ず
・寒い日かも！？ 	
・夜かも！？ 	かいじゅうでんどう キニア附付 暗い道でも安全に通れる
電気や水道、火が使えなくなるかも！？ ・のどが、かわくかも！？ 	水 (ハートボトル) 非常食 お菓子がすぐのもの？
・お腹がすくかも！？ 	非常食 コンビニに行けない 作れない時間帯がある 缶詰 食べ易いもの 缶詰のカンパン
・手が汚れたらどうしよう！？ 	氷が糖 水のかわり 乾電池、バネ、おもちゃ 非常食のおかず 塩辛
・お皿も使ったら洗えない。どうしよう！？ 	手が汚れてはどうしよう？ ウェットティッシュ (お絞リ) 皿が洗えないかも 紙コップ、紙皿、割り箸
・洗濯もできない！？ ・おふろにも入れない！？ 	ラップ お風呂 ラップで包む タオル ハンカチ 汗拭きシート 替ええ タオル ハンカチ

<p>防災について勉強をして</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めて知ったこと ・知っていたけど、もっとくわしくなったこと ・考えたこと 	<p>学校などある防災設備は地震 や火事などで命を助けてくれる 道具でしたこと。でも安全、安心 して使うことです。</p>
<p>四季防災館について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験したこと ・感想 	<p>火垂体験は何も見なくて、進み にくかったけど体を低く進みました。 暴風は弓強い風に吹かれて、 飛ばされそうでした。本当は怖かったけど</p>
<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族とはなしあったこと ・これからどうするか ・感想 	<p>大地震がきた時、どこに避難すればいいか話し合う。 非常袋に何が必要なのかを話し合う。 家族がバラバラな時、地震に あったら、どうすればいいか聞く。</p>

— 151 —

④家庭との連携

本授業において学習に使用した教材や記入したワークシートは家庭に持ち帰り、情報を保護者と共有するようにした。また、自宅での避難行動や非常持ち出し品が準備してあるか調べる事を家庭での宿題とした。これらの工夫を行ったことで、学習内容を保護者が理解するとともに、生徒と保護者がともに防災について考え話し合う機会を提供することにつながった。保護者からは「子どもと非常持ち出し物について話し合った」「日頃から準備しておきたい」「頭を守る大切さについて、家庭でも確認した」などの感想が挙げられた。

この授業実践を通して生徒、保護者ともに防災に対する意識が高まり、多様な場面での防災について考えることができるようになった。学習内容を家庭に繋げることで、保護者や家庭との連携を図ることもできた。

(2) 同窓生親の会における研修会について

同窓生親の会では、卒業生の保護者と卒業生を対象に、防災への意識付けを目的とした研修会を実施している。富山県内にある防災体験や学習ができる施設を利用した研修会である。保護者にとって避難時における我が子の実態を知り、防災について考えるとともに災害時における課題に気付く契機となっている。

3. 考察

富山大学間発達科学部附属特別支援学校では、特色ある避難訓練や授業実践が行われており、生徒の防災に対する意識の変容などの成果がみられた。

(1) 障害の特性に配慮し、地域との連携を意図した避難訓練の実践を通して

①地域につながる避難訓練

附属四校合同避難訓練は大学附属学校としての環境を生かし、学校の枠を広げた訓練の取組であり、今後は地域を含めた防災訓練につなげていくためのステップと捉えることができる。避難後に、落ち着かない緊張感の中で、慣れない環境のもと、日常的に関わりの少ない人と一定時間過ごす体験をする貴重な機会といえる。一緒に待機する他校の幼児児童生徒にとっても特別支援学校の児童生徒の実態を知る意味がある。訓練時には、児童生徒の特性を理解して対

応できる担任教師と一緒に過ごすことができるため児童生徒は落ち着いて避難、待機をすることができている。

今後は、日常的に対応できる人を増やし、環境も整えて行く必要がある。まわりからの配慮に加えて、児童生徒が自分から自分の状態を伝えたり支援を求めたりする機会を学習や訓練場面で積極的に設定していくことが求められる。

②避難訓練の工夫と改善

富山大学附属特別支援学校では、災害対応力を高め避難時に適切に対応ができるようにするための工夫として、「気温に合わせ防寒具を着用すること」と「携帯電話を持つこと」が挙げられた。これらの工夫は「寒さ対策のために、避難の後で余震の中防寒着を取りに戻った」「連絡の手段が全くなかった」という実際の被災地の報告を受けて避難訓練時のマニュアルに取り入れた内容である。命を守るためには一刻も早く避難することが重要ではあるが、避難後の寒さ対策や避難後の保護者との連絡の必要性など現実的な訓練を考慮した避難訓練の工夫である。

このように、有効な情報を得てマニュアルの内容や工夫点に検討を重ね、改善を加えていくことの必要性が示されたと言える。

(2) 年間指導計画に明記し教育課程に位置づけた授業実践と、障害特性や生活スタイルに応じた防災教育の充実

「地震防災について考えよう」の授業実践を通して生徒、保護者ともに防災に対する意識が高まり、多様な場面での防災について考えることができるようになった。学習内容を家庭に繋げることで、保護者や家庭との連携を図ることもできた。生徒の災害対応力の向上に加えて保護者への啓発にも役立ったと考える。今後は、学校全体としての実践と充実が望まれる。

また、同窓生親の会での防災に関する研修の実施は、卒業後の生活における防災対応力を保護者や学校の教師が深く考える機会となっている。今後も継続的な実施が期待される。

IV まとめ

今回調査した Z 県内の知的障害特別支援学校な

らびに富山大学人間発達科学部附属特別支援学校では、知的障害のある児童生徒の特別支援学校において、防災教育の必要性が高まり、避難訓練の内容や方法に工夫を加えた実践が進められてきている。また、パターン化された訓練を防ぐために、状況を変えながらの訓練の実施などの工夫も見られる。備蓄への意識も高く、内容の充実もなされてきている。藤井ら（2014）が指摘する「教育的工夫」が進められているといえる。

今後は、日常生活の中に定着し、知的障害のある児童生徒が避難後も安心して過ごすことを考慮した防災教育の方向性を検討することが必要である。そのために、防災教育の授業実践の充実や地域との連携が優先して望まれる。また、危険を判断して自分の命や身を守る能力に加えて、状況を尋ねたり援助を求めたりする力を含めて災害に対応する力を授業の中で高めていくことも重要である。

特別支援教育における防災教育については、先行研究や事例が少なく、これからの研究や実践報告が望まれる。一つの学校の実践だけではなく「防災教育」のネットワークづくりが必要である。富山大学人間発達科学部附属特別支援学校の実践をもとに改善を加えながら有効な避難訓練や授業実践につなげていくことが求められる。先駆校は効果的な実践を発信し、情報を共有できる体制整備していくことで防災教育の普及と質の向上に繋がると考える。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、調査にご協力くださいました Z 県内知的障害特別支援学校の先生方に深く感謝いたします。

引用・参考文献

藤井基貴・松本光央（2014）：ちてきしょうがいがある児童生徒に対する防災教育の取り組み—岐阜県立可茂特別支援学校の事例研究—。静岡大学教育実践総合センター紀要，22，73-81。
近藤正幸（2015）特別支援学級における防災対策及び防災教育に関する課題と支援の在り方—平成25年度全特連被災地調査から—。特別支援教育研究691，20-23。
文部科学省（2011）東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議中間とりまとめ。

文部科学省（2012）東日本大震災を受けた防災教育の展開：防災教育のための参考資料。

文部科学省（2013）学校防災のための参考資料：「生きる力」を育む防災教育の展開。

内閣府（2003）：防災に関する人材の育成・活用について報告。

龍海咲・荏田知則・岸田直也・渡部舞（2013）：発達障害児に対するデジタル教材等を用いた防災教育に向けて。日本教育情報学会，年会論文集（29），386-389。

坂本真理（2011）：学校教育からの学校防災教育アプローチの可能性。社会安全学研究，創刊号，207-218。

佐藤公治（2012）：地域の力を生徒の危機回避学校危機管理にいかんにか。特別支援教育の実践情報，149，26-27。

杉谷綾子・河合俊典・富永光昭（2012）：全国都道府県・政令指定都市教育委員会における障がいのある幼児児童生徒の防災教育・訓練計画及び防災マニュアルの作成の実態と課題（2）—通常の学校・幼稚園における障がいのある幼児児童生徒の防災教育・訓練計画及び防災マニュアルについての質問紙調査を通して—。大阪教育大学紀要61（1），147-159。

戸ヶ崎泰子・中井靖・木村素子（2015）：知的障害と肢体不自由の重複障害児に対する防災教育。宮崎大学教育文化学部紀要，創立130周年記念特別号，187-198。

矢崎良明（2012）：地域住民が主体となった避難所開設訓練。特別支援教育の実践情報，149，20-21。

（2015年10月20日受付）

（2015年12月9日受理）